



土佐女子中学高等学校新中校舎落成記念

喜多流能

平成三十年十二月四日(火)

開場十二時三〇分 開演十三時

土佐女子講堂

高知市追手筋二―三―一
電話〇八八(八七五)三二―一

入場料 一〇〇〇円

チケット販売 学校事務室

ごあいさつ

かつて美しく土佐女子の中央に位置していた中校舎が、その北側に今までとは違った趣の校舎として生まれ変わりました。

五年前、新講堂・体育館が一回り大きくなった立派な姿で落成しましたときも、皆様に古典芸能の「能・羽衣」の美しさをご披露いたしました。今回もより華やかな舞台を観賞できますことは私どもにとりましてこの上ない喜びとするところであります。本校の永遠を占うかのように文殊菩薩の使いである親子の獅子が舞う様をお楽しみください。

学校法人 土佐女子高等学校

理事長 西山 彰一

喜多流能

舞囃子 高砂 粟谷 明生

大鼓 梶谷 義男
大鼓 三王 清
小鼓 横山 幸彦
笛 杉 信太郎

解説 金子敬一郎

地謡
佐藤 陽
内田 成信
金子敬一郎
粟谷 充雄

半能 石橋 ツレ子獅子 粟谷 浩之
シテ親獅子 粟谷 能夫

連獅子

後見 狩野 了一
佐藤 陽

太鼓 梶谷 義男
大鼓 三王 清
小鼓 横山 幸彦
笛 杉 信太郎

地謡
粟谷 充雄
金子敬一郎
粟谷 明生
内田 成信

石橋 しやつきよう

あらすじ

寂昭法師は、文殊菩薩の浄土・清涼山の麓に到り、清涼山へと架かる石橋を目の当たりにする。石橋について尋ねようと人を待っている、そこに薪を背負った老人が現れる。これから石橋を渡ろうと言う寂昭を、老人は、これまで名高い修行者が修行を重ねようやく挑んできた橋であり、生半可な気持ちでは渡れないと諫める。感心した寂昭は老人に乞い、橋についてさらに詳しく聞く。老人は、橋の起源と徳について説明する導入からはじまり、石橋の成り立ちと険しい様子について語る。やがて雲間から花が降り妙なる音楽が聞こえてくる。老人は寂昭に、これは文殊菩薩の奇瑞の前兆である、しばらくの間その来現を待ちなさいと告げ、姿を消す。その後、文殊の使いである獅子が現れ、牡丹の花に戯れ舞い遊ぶ。獅子は御代の永遠を祈って舞い納め、また獅子の座へと戻る。

本日の半能「石橋」は、獅子舞を中心に演能いたします。



あわや 粟谷 能夫 よしお

昭和二十四年九月生。粟谷新太郎の長男。昭和三十一年十五世宗家喜多実に入門。流儀を超えた同人組織「三鈴の会」を結成。平成十二年には従弟の粟谷明生と「粟谷能の会研究公演」をスタートさせ、地謡の研鑽や小書の見直しを行うなど、積極的に活動を続けている。
「粟谷能の会」主催。
重要無形文化財総合指定保持者。
能楽協会会員。一般社団法人日本能楽会理事。
観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。
「粟谷家所蔵能面選」監修。
高知粟谷会の指導に長年尽力している。

